# ③谷戸文化ふたたび

## 「まいおか水と緑の会」の活動から

十文字修

一――横浜の原風景・谷戸
二――舞岡谷戸への取り組み
三――水、土、緑の復興へむけて

### 一――横浜の原風景・谷戸

横浜は市域の七割が台地、丘陵から成り、そこには大小無数の谷間が刻まれていた。谷戸、武蔵国南部から相模国にかけ、この谷間はそう呼び慣らされてきた。語源はアイヌ語だとも言うものの定説はないが、ヤツ、ヤチなどと同系列の言葉だと推測される。丘の上には畑が点在し斜面には雑木林、地肌から滲み出る湧水は低地の水田を潤し、寄り集って川となる。谷戸は市内を流れる川が最初の一滴から、その流れを始める場所でもあった。

横浜の緑を語ることは谷戸を語ることと言っても過言ではないだろう。そしてまたそこに暮らし続けてきた人びとの存在を抜きにしても語れはしない。よく知られるように、クヌギ、コナラ、ヤマザクラなどの雑木林は薪炭の供給源として人工的に育まれた緑であるし、水田や畑はむろん言うまでもない。純粋無垢な自然ではなく人の営みと自然とがほど良い調和を醸し出した空間、それが谷戸の世界である。

ミナトが横浜にとって外向きの華やかな顔であるとするならば、ヤトは地味ではあるがより暮らしに根ざした日常生活の表情である。控えめに見積っても、後者は前者に比べ十数倍の時間的スケールを横浜という地域の歴史の中に占めている。また横浜のように急激に人口の増えた都市では、住民の大半が幼い頃、少なくとも二代、三代さかのぼれば、農村での暮しを経験している。春の新緑、夏の蟬しぐれやホタルの群舞、秋の収獲、冬の枯野。田んぼでのザリガニとりや小川での水遊び。セリやアケビなど四季折々の味覚。開発の波に洗われ残り少ないものとなってしまった谷戸の田園風景は、都市生活者にとって遠い昔の記憶をやすらぎと共に思い起こさせる原風景でもある。

### 二――舞岡谷戸への取り組み

戸塚区舞岡町の南のはずれに、南北にはしる奥行き一キロほどの谷戸がある。柏尾川の支流舞岡川の源流域であるこの谷戸は、横浜水文学研究会のデータによると、出口付近で毎秒八ℓの流水量が測定されている。豊かな湧水はゲンジボタル・ヘイケボタル・タイコウチ・サワガニ・クサガメなど水辺の生物にとって絶好の環境を形づくり、サシバ・オオヨシキリなど野鳥も豊富に見られる。野ウサギもすんでいる。まわりを囲む約五〇*ha*の緑地をあわせ、私たちはこの市内有数の自然の宝庫を「舞岡谷戸」と呼んでいる。

この地を守るささやかな活動が始まって一年余りが経った。意識の上ではともかく実際の行動としてはまったく経験のない私たちは、試行錯誤の中で大ざっぱに言って、次の三点を原則としてきたように思う。

まず、舞岡谷戸の存在を広く世間に知ってもらうということ。丘ひとつ越えた新興住宅地に住む人がそこに谷戸のあることを知らない。歩いて五分の場所にホタルが出ることを、ホタル見会で目のあたりにして驚くというのが現実である。日常の行動パターンの死角になっていたからこそ豊かな自然が残されてきたことを思えば無理もないが、住民が気づいた時には手遅れというのが都市の自然がくり返したどってきた運命ではなかったか。幸い付近一帯は市街化調整区域であり、具体的な開発計画こそないものの、来春の地下鉄舞岡駅開業を思うとこの先どうなるか分ったものではない。加えて谷戸の奥半分は市の舞岡公園予定地になっている。芝生にベンチ、グラウンドといった都市型公園でなく、今ある自然を

最大限生かした形のものにしたい。そのためにも市民の声の盛りあがりが必要なのである。

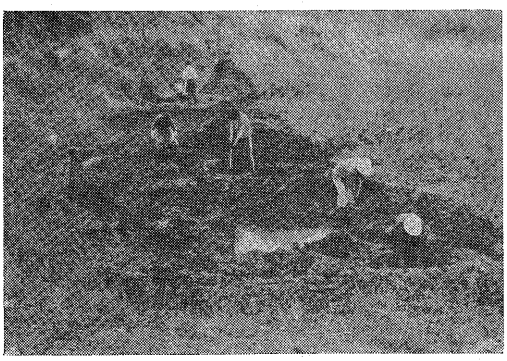
夕涼みホタル見会、戸塚センターでの舞岡谷戸展、各種団体・グループを案内して歩く、などの活動は一部新聞報道もされ、その効あってかこの春は例年になく谷戸で遊ぶ人の姿が目立つ。反面、ホトケドジョウやザリガニがめっきり減った、という報告を舞岡高校生物班の生徒から受けている。そのことにはしばらく目をつむり、谷戸を訪れはじめた人たちの何割かが守り手に加わってくれることを期待したい。人知れず楽しみに浸っていればよい、という幸福な時代ではもはやないのである。

アシの刈り取り

二点めとして、でき得る限り身銭を切ることを引き受ける。それは金銭的な面にとどまらず、時間や労力を費やすことまでを含む。自分たち市民の手で守るのだという姿勢を常に基本に据えておく必要がある。もちろん行政に要求する権利は、最大限に行使しなければならないが、要求することと依存することの違いが紙一重であることの危うさを、常に見据えておきたい。環境を守り築いてゆく主体はあくまで市民であるということを、行政に対して、そして何よりも市民自身に対して示したいのである。

舞岡谷戸にはありとあらゆるゴミが棄てられている。廃材、冷蔵庫、古タイヤ、空きカン等々、私たちはリヤカーや一輪車をくり出してこれらを片づけている。目ざわりだから、片づける。それ以上でもそれ以下でもない。ああ、ボランティアですね、と、わけ知り顔で言う人がいるが、そうした言葉で素通りして欲しくない。本来私たちはこうしたことが当り前にできたはずなのだ。

アシの地下茎城り



三点めとして、谷戸の自然は農的自然であり、維持するためには人による管理が欠かせない、ということを踏まえておきたい。人手を拒絶した潔癖な自然は都市から遠く離れた深山幽谷に望む。私たちが身近かにあって守りたいのは、クズがお化けのように垂れ下がる梢ではなく、下草の刈られた雑木林であり、アシの好き放題に繁茂する休耕田ではなく周囲の緑を水面に映す谷戸田のながめなのである。ホタルにせよ、アシ原より耕作中の水田に多く生息することが知られている。時の流れのままに放置された緑ではなく、年月と共に更新されてゆく緑。そのための作業には当然のことながら農の方法が必要となってくる。

田植え

今春から地主の方の好意で水田耕作を始めることができた。折あるごとに地つきの人に永年つちかわれた経験を伝授してもらっている。近い将来雑木林の下草刈りや植林にも手をつけられれば、と考えている。

なお、谷戸一帯は舞岡農業専用地区にふくまれ、現実にここで生活の糧を得ている人もいることから、農家との関係はより一層重視してゆきたい。

## 三――水、土、緑の復興へむけて

つとめが休みの朝は食事もそこそこに自転車で家を出る。ひざまでの長靴、かごには作業用ゴム手袋に弁当、カメラが入っている。途中橋の上でひと休み、柏尾川をのぞき込む。この春は寒さのせいか、ボラの遡上も例年に比べ幾分遅かった。再びペダルをこぎつづけ、舞岡谷戸の丘の一角にたどり着くのが家を出てから三〇分、そこから農道を砂利をけたてて一気に駆けくだる。

四、五月は週末に連休と舞岡に通いづめだった。谷戸の真ん中あたり、援農という形で待望の水田づくりが始まったのである。十数年来の休耕田を田に戻すとなると、開墾と呼んだ方がふさわしい。まず生い茂ったアシを刈り取る。次いで地下茎を抜き取る作業が延々とつづく。深さ五〇センチまでびっしりはびこったアシの地下茎は生命力旺盛で、こま切れにしたぐらいではいずれ芽吹いてくる。そこでスコップで穴を掘り拡げ、根気よく引き抜いてゆくわけである。

片わらの農道を行きかう人たちから、早速質問が浴びせかけられる。「ハスかあ!?」「何か遺跡の調査ですか」「ミミズ探してるの」「金でも埋ってるのかよ」。田づくりと判明すると、感心したり呆れたりしながらしばらく立ちつくしてながめている。食糧問題や生まれ故郷での思い出話にひとしきり花を咲かせてゆく人も、少なからずいた。

ともあれ、五月半ばには地下茎除去作業完了、積みあげられたアシガラ山は大人の背丈ほどになった。しろかき、あぜぬりを経て水張りも終え、六月三日の田植えにこぎつけることができた。面積約五〇坪。

ここに至るまでさまざまな人びとが一緒に働いてくれた。合成洗剤追放や有機農法をめざす人たち、横浜の河川の再生に取り組むグループ、地元の劇団、そして何よりも農家。私たちがやろうとしていることは、自然保護運動という呼び方では言いつくせないもののような気がする。

古来より、大河川を制御するような高度な技術や大量の労働力、ひいては政治的権力の集中を、谷戸の土地利用は必要としなかった。そのことが小規模な村落共同体の存続を保証していたのである。もちろん入会権、結などの旧来の諸慣行をそのまま現代に持ち込むことはできない。けれども市民の七割近くが現住所に住み続けると答え、定住傾向が顕在化しつつある今日、新らたなコミュニティ形成の場として、ヒューマンスケールな谷戸空間の持つ可能性は見直されるべき時にきている。

田づくりでは、手伝ってくれた地付きの人の手ぎわの見事さに感心させられた。と同時に新住民の方も、信州ではこうだった、いや岩手では、山口では、と出身地での経験を思い出しながら結構こなしているのが面白い。こうした技術が、土と切り離された生活のなかで次第に忘れ去られてゆくのは、いかにも惜しい。

谷戸からほど近い場所で炭焼き窯を作る話もすすんでいる。地下資源の涸渇にまで思いを及ぼさなくとも、単純に言って炭を使った料理はおいしい。戸塚ではまだ炭焼きで収入を得ている農家があることを見ても、薪炭の市場開拓の可能性は一考の余地がありそうである。

私たちが谷戸にこだわる動機は過去に対するノスタルジーではなく、現代の都市生活における対自然、対人間の関係の貧しさからの回復への希求である。科学技術のピントはずれの方向への発展が、自然を破壊し人の疲労をつのらせ、分業の細分化が人間関係をますます疎遠にしてゆくかに見える今日、谷戸の水、土、緑に育まれた文化はもうひとつのあり方の可能性を私たちに提示してくれる。そしてまた、文化の継承とは陳列棚に小ぎれいに並べて見せることではなく、それを必要とする人の手から手へすすんで伝えられてゆくことでなければならない。

いつの日か蘇った谷戸田にうなるようなホタルの群が、雑木林の深い夜闇を背景に乱舞するさまを思い描きながら、谷戸文化の復興と創造を願う次第である。

〈まいおか水と緑の会・戸塚区在住〉